

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

## ゲンノショウコ *Geranium thunbergii* Siebold et Zuccarini (フウロソウ科 Geraniaceae)

7～9月ごろ、山歩きの途中、道端で梅に似た花をつけ、地を這うようにして生えている植物を見かけることがあります。健胃・整腸薬として有名なゲンノショウコです。「現の証拠」という植物名は下痢止めに服用するとすぐに効果が現れることに由来します。本植物は日本では北海道の草地や本州～九州の山野に自生し、白色または紅色の花（白花は東日本、紅花は西日本に多い）を枝先と葉の脇から長い花軸を出して数個付け、花弁は5枚で赤い筋が走り、がく片5枚、雄しべは10本あります。全体に下向きの毛が生え、葉は3～5裂の掌状、巾は3～7cm、長い柄を持ち対生、裂片は先でさらに3つに分裂し倒卵形、葉は柔らかな紙質で縁は鋸歯型をしています。

ゲンノショウコは漢方薬ではありません。ドクダミ、センブリと共に、日本三大民間薬の一つと言われ、昔から民間伝承により使用されてきた民間薬です。第17改正日本薬局方には「ゲンノショウコ」として収載されています。有効成分はゲラニイン geraniin などのタンニンやケルセチン quercetin などのフラボノイドです。花のついた茎・葉を干し、煎じて下痢止めや胃薬とし、また、茶としても飲用します。下痢止めとしては1日量10～20gを水0.5ℓで煎じ約半量まで煮詰めたものをさらに濾して、温かい状態で1日2回に分けて服用します。飲み過ぎても便秘を引き起こしたりせず、優秀な健胃・整腸薬であることから、イシャイラズ、タチマチグサなどの異名もあります。また、花が咲いた後、果実が熟すると外果皮が下から裂開して上へ巻き上がり、その形が神輿みこしに似ていることから、ミコシグサとも



写真1 ゲンノショウコ (白花)



写真2 ゲンノショウコ (赤花)



写真3 ゲンノショウコ (果実)

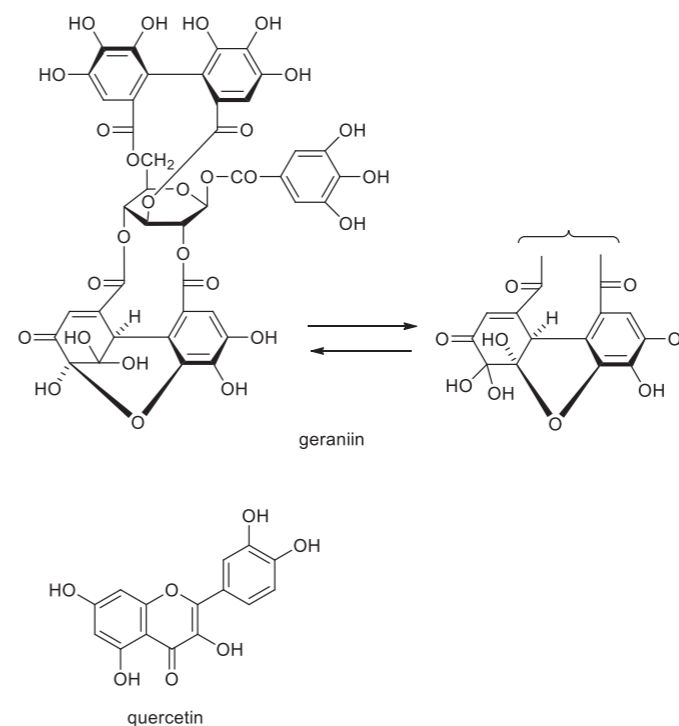


図1 成分の構造式

呼ばれます。属名の *Geranium* はギリシア語で「鶴」に由来し、長くちばし状の果実を鶴にたとえたものです。

生薬としての使い方は簡単で、開花期の7～8月頃に根を除いて抜き取り、天日で乾燥させます。泥が付着していることが多いのでよく洗って下さい。若葉のころは、トリカブトやウマノアシガタなどのキンポウゲ科の有毒植物に似ているので注意が必要ですが、夏の開花期であれば花で確認できます。その他、利尿、高血圧予防にも良く、また、ゲンノショウコ100gとヨモギ100gを使ったゲンノショウコ風呂は

婦人病（冷え性、血の道、しぶり腹）に効くとされています。その他、本属植物の仲間には、昭和初期、日本に入った北アメリカ原産の帰化植物であるアメリカフウロがあり、高原から北アルプス、東北、北海道の高山では、アサマフウロ、グンナイフウロ、ハクサンフウロ、チシマフウロなども見ることができます。きっと、この夏、夏山登山でこれらの花を見られた人も多いでしょう。